

読切官能小説

つばめくん

南綾子

わたしはただの道具。産婦人科で働く紗江は不倫の恋人の身勝手なセックスにうんざりしていた。そんなとき、待合室で見かけた暗い目の少年のことが忘れられず――。

カニのトマトクリームスパゲティをもそもそとしゃくしながら、朝田夏美がいまさら気がついたような言い草で、「よく平常心で働いていられるよね」と言った。

彼女は長島のことを言っているのだと高橋紗江は思った。だから、納豆としめじの醤油スパゲティをフォークにくるくる巻きつけながら「もう慣れたよ、何年付き合っているとっての」と一笑に付した。

「そうじゃなくてさ」と夏美は言う。「あの男のことじゃなくて、なんていうの？ 患者さんでいいのかな？ 毎日毎日、次から次へと目の前に妊婦さんが現れては去っていくわけでしょ？ 気が変にならない？ わたしだったら耐えられないよ」

「ああ、それももう慣れた」

と、紗江はスパゲティを巻き直しながら答えた。

というような会話を昨夜、夏美の家の近所のスパゲティ屋でしたことを、初診で来た妊娠初期の女性に体重と血圧を測るよう指示しながら紗江は思い返す。慣れた、とはずみで答えてしまったが、それは嘘だった。この小平産婦人科医院で受付の仕事をはじめてから五年がたち、これまで数え切れないほどの妊婦を目にしてきたが、いまだ彼女たちの異様とも言える形状に慣れないでいた。手足は華奢なのに、お腹だけ丸く膨らんでいる姿はまるで栄養失調児のようだ。苦情が出るとまずいのであるべくじつと見ないように気をつけているが、そうでなければいつまでも観察していたいと思うときがある。

でもきつと、夏美の言いたかったことはそういうことではない。妊婦たちの姿を見て、焦りや嫉

妬を感じないのかと彼女は聞きたいのだ。このところ、彼女はその手のことにやたらと敏感なのだった。今年のはじめに三十歳になったことが関係しているのだろうし、三年近く不倫している田畑とかいう男の妻が二人目の子供を出産間近というのも関係しているのだろう。確かに紗江もこの医院に入った当初は、子供が誕生したばかりの若い夫婦などを目の当たりにして、幸せそうだと羨んだこともあった。しかし年々そういった感情は涸れていつて、今ではとにかく「妊婦って不思議なかたちをしているなあ」としか思えないし思わない。

理由はよくわからない。とにかく妊婦を見ても羨ましいと感じない。強がりではないと思う。子供はいつか授かったほうがいい気がするが、渴望はしていない。

こういうことを考えるとき、自分は生物として何かが欠けているのだろうかと感じるのだった。あるいは長島から伝え聞く彼の家庭の様子があまりに殺伐としており、それに影響され、結婚や出産というものに理想をいだけなくなっただけなのかもしれない。彼が本当の話をしているのかは、わからないけれど。

「ジョージツ、ちよつと、アンナ見ててよっ」

そのとき女の怒鳴り声が響き、紗江の空想は強制的に中断された。院内の視線が一気にそちらに集中する。女は気に留める様子もなく乱暴な手つきで診察券を機械に差し込みチェックインを済ませると、何事かをぶつぶつといらだたしげにつぶやきながら、体重計まで移動して体重と、続いて血圧を測った。

彼女は燕さんという。あだ名ではなくて、本当にそういう名前なのだ。北海道の一部の地域に